

## ジャック・リゴーに関する覚書

三好美千代

### 序

1920年パリを席卷したダダイスム運動に関わった人物ジャック・リゴーの名前はフランス文学史のテキストの中には見当たらない。ダダの運動を中心に扱ったテキストでも30才でピストル自殺をしたと書かれているのみで、どういう人物だったかは多く語られてはいない。ところが、一方で、彼はドリユー・ラ・ロシエルの『鬼火』（1931）のモデルであり、またアルテュール・クラヴァン、ジャック・ヴァシェらと共にダダの運動における自殺をした伝説的三人の人物の一人なのである。1898年に生まれ1929年に三十才でピストル自殺を遂げたりゴーはどういった人物だったのだろうか。

1934年、未発表の原稿が一部収められた『遺稿集』が、1959年、そこに収められた一作品の題を総題とした『自殺総代理店』が出版された。そして、1970年には、残された原稿がほぼ網羅された形でまとめられ、『エクリ』のタイトルで出版された。『エクリ』には生前リゴーを知っていた人々の証言や手紙の一部も収められており、リゴー全集と言ってよいものである。

『エクリ』の出版で、ダンディを表看板とし、自殺を言葉どおりに実行した風変わりな人物としてしか認識されていなかったリゴーの内面性に触れ驚いた人は多いはずである。彼のアフォリズムには、ドリユー・ラ・ロシエルが『ゴンザーグへの別れ』の中で言うところの「空のトランク」を抱えた男が、そしてル・クレジオの言うところの「幸福になることへの無能力」が非常に切実な思いとして読み取れる。ドリユー・ラ・ロシエルが言うように彼の「空のトラ

ンク」を満たしてやれば彼は生き続けることが出来たであろうか。それよりも、そうすることが周囲の人間に可能だっただろうか。リゴーの答えは挑戦的である。「出来るならやってみるがいい。自殺を襟のボタンホールに飾って旅をしているような男を止められるものなら。」彼はそう言い残し、自らの心臓に弾丸を打ち込む。失敗しないように定規を用い、音を和らげるために枕を使い、身体の下にはゴムのシーツを敷いて。

ブルトンは『黒いユーモア選集』の中でリゴーを取り上げ、次の一文でリゴーの自殺を語ろうとする。「人生における何よりも素晴らしい贈り物は、あなたの方の選んだ時刻に、そこから出ていくことが許されているという、少なくとも理論的に存在する自由であるが、その自由は、おそらく、臆病さや、自然の必然から見れば、あまりにも難解かつ理屈にあわない、人間によって作られた必然がしかけるあらゆる罫との激しい闘いによって、手にする値打ちのある自由なのだ。」ブルトンはアバンギャルドの運動の中での英雄を作り上げる。リゴーは、自分の生を自殺という自由を勝ち取るために闘い抜いたことになる。この一文は『自殺総代理店』の巻末にも引かれており、おおよそのリゴーに対する見方のようなものである。現実として、彼の自殺はアメリカでの離婚、アルコールとヘロインに溺れた生活、そして窮乏生活、フランスへ帰っての入院生活といった実生活上の痛ましい要因が大きく作用しているだろう。彼の死を準備されていったものと看做してよいのか、他の多くの痛ましい自殺と等しいものとみなしてもよいのか。それに関して、筆者は語る術を持たない。しかし、いずれにしても彼の書き残したものには生きるということに関する根本的な問いかけ、あるいは自殺の哲学があり、それが彼の書き残したものに文学としての価値を付与している。

(一)

ジャック・リゴーは1898年12月30日にパリで生まれている。多くの記述が1899年となっているが、おそらくは年譜にあるこの日付が正確など

ころであろう。ルイ・ル・グラン高等中学校を経て哲学学級の新学期にバカロレアに合格。1916年、法学部に登録、その年、わずかに18才で兵役志願、1918年にはロレーヌ地方の前線にも行っている。1919年に動員を解除され、法学部に戻り、その時文壇との付き合いが始まり、ドリュウ・ラ・ロシェルともそのとき知り合っている。同年、大戦中にスイスのチュウリッヒでフーゴー・バル、トリスタン・ツァラ等を中心起こったダダの運動はツァラとともにパリに至り、本格的なダダの宣伝活動が始まる。1920年7月、リゴーの最初の作品『無気力な話』が〈アクション〉誌に掲載される。同年の12月、当時パリのダダイストの機関誌となっていた〈文学〉（ブルトン、アラゴン、スーポーらが発行しており、雑誌名は反語的に付けられた）の17号に『私は真面目になる・・・』が掲載される。1921年『ある貧しい青年の物語』がやはり〈文学〉誌に掲載。5月には〈バレス裁判〉がアンドレ・ブルトンを裁判長に開かれ、ツァラ、ドリュウ・ラ・ロシェル等と共に証言台に立っている。また、同年、ツァラ主催でモンテーニュ画廊で開かれた〈サロン・ダダ〉展のカタログには『寓話』と題されるテキストが掲載。1922年、ブルトンが企画した〈指令の決定と近代精神防衛のための国際会議〉いわゆる〈パリ会議〉の試みはツァラの反対によって失敗。二人の関係は決裂。そうした状況のなかでリゴーは〈文学〉誌に3月『ミア・マレイ』、4月『優等生』を掲載。9月、〈文学〉誌はブルトンの単独編集となり、誌上でブルトンはダダと絶縁。1923年、すでにダダの運動がなくなったパリでリゴーは形成期にあったシュールリアリストの運動には加わず、社交生活に身を置く。8月、ドリュウ・ラ・ロシェルがリゴーの肖像をアイロニカルに描いた『空のトランク』を〈新フランス評論〉誌に掲載。その年の終り、リゴーのアフォリズム『行』がアメリカの季刊誌〈ザ・リトル・レビュー〉に掲載。この時点でリゴーの文学活動は終了しており、それから六年後、1929年に自殺するまでリゴーの作品が発表されることはない。

残された作品を見ると、終生ダダであることを貫いたと言ってよいように思

われる。第一次大戦後の価値観の混乱期に最も多感な時期を送り、怒涛のようにパリを襲い、消滅していったダダの運動に関わりつつ、独特の個性をその作品の中に展開した人物として非常に残念なことである。

## (二)

生前〈文学〉に発表された作品『ある貧しい青年の物語』でリゴーは独特のものの見方を示している。戦争を体験したことを別にすれば、ロールスロイスに憧れるごく普通の青年である。また、『ミア・マレイ』ではバレンチーノの相手役もしたアメリカ女優を手放しで賛美するといった微笑ましい側面を見せている。しかし、その青年の頭の中には一方で、自殺という言葉が存在している。「考えるということは貧乏人のすることである。哀れな代償である。私は一人のとき考えたりしない。強いられたときだけしか考えない。様々な拘束、面接の準備、父親の期待、我慢することになる職業、給料を貰うためのすべての努力は、私を考える方向へ、つまり自殺を決める方向へと向かわせる。その二つは結局同じことなのだ。考えるやり方はいくつもない。考えるということは、死を考慮することであり、決断することである。」この世界が生きるに値するかという大命題がまずあり、すべてはそれを基準に判断される。考えるということは、与えられた条件に対してそれでも生きるべきかと考えることなのだ。貧しい人達は生きる条件が厳しい。それゆえに哲学者になるのだ。そして、いとも簡単に仕事につく努力か自殺かという二者択一の論理が出てくる。

さて、リゴーにとっては金銭があるかどうかすべてである。彼によれば愛情さえも金銭で買えるのだ。しかし、働くことで人から金銭を受け取るとは彼のダンディズムには反する。「金を稼ぐなど恥だ。患者がテーブルの上に紙幣をのせるとき、医者はどうして赤面しないでいられるのだろう。一人の紳士が、また別のいくばくかの金銭を受け取るような立場に身を置いたら、その時から、ズボン而降ろすように言われるかもしれないのだ。無報酬で遣われるのがいやならなぜ遣われたりするの。私なら巧妙に盗むだろうというのは、

はっきりしている。」金銭のために自分を売り渡すことは出来ない。盗みで裁判所に行くほうがまだましだというのだ。ところが幸いなことに株式取引所があり、そのほかにも金銭を巧妙に盗む方法はいくらかでもあるというのがリゴーの言い分である。愛と金銭とをその必要度で同じ土俵に置き、かつ愛さえ金銭で変えるものとリゴーは言う。この世に愛があると思えば生きやすくなるというのが通常の論理であるが、リゴーはこの世の中に金持ちがいると思うと生きやすくなると言う。

ところで、リゴーにとって愛を支えに生きると言っている人々の人生の送り方はどうなのだろう。結局リゴーとそう変わりはない。「我々は、今まで、可能性だけでしか生きてこなかった。とはいっても、それはジュリエットのバルコニーではなくて、バカラゲームの部屋の緑のクロスの上で、賭け手から賭け手へと一厚みを変えながら一移動する、そんな青い小立体であった。ここ一番の大勝負。テーブルの廻りでは、人々の顔がゆっくりと表情を変えてゆき、やっと微笑が浮かんできて、それから、ふるえている指が動かなくなってゆくのであった。」生きるために愛が必要と考えてもそれがよすがとにならない現実がある。金銭がすべてを決すると考えるリゴーにとって、周囲の人々の人生の場は賭博場のようなものなのだ。しかし、そうした人生に関わりのない人々がいるのも理解している。「夜明けに、カジノから、バックの中に傲慢に過ごした何年もの年月をしまった女が出てきて、道の途中で、濡れて網を担いだ小海老とりの女達が海から帰ってくるのに出会った。それを見て、私は尊敬とはどういうことかを理解した。」人生のカジノで勝ち続けてきた女性、おそらくは男達を翻弄し、純粹な労働には縁のなかった女性であろう。そして本来の労働を体現している女性達。彼女達はカジノに例えられるような場所では生きてきていない。そして、新聞広告風の次の一文でこのテキストは結ばれる。「凡庸な貧しい青年。21才。犯罪歴なし。24気筒、健康、色情狂、ないし安南語を話す女性と結婚したし。」24気筒の車は当時、高級車である。リゴーによれば、豊かさが愛されるための属性を持たせるというのであるから24気筒の

女性とは、当然金銭的豊かさを備えた女性であろう。リゴーがダダに関わったごく初期のものとしてこの作品を記憶に止めておくことにしよう。

(三)

1921年、ダダイスト達は初期の態度を変節したとしてモーリス・バレスに対して、精神の秩序の壊乱罪を適用し模擬裁判を行った。自我を確立した自由人を説いたバレスが、ダダイスト達の嫌悪する保守主義者、伝統主義者、愛国主義者として立ち表われたからである。このときブルトンとツアラの本質的相異が明らかになる。そして、バレスはその一年後に亡くなっている。そうした文学史上の話はさておくとして、バレス裁判におけるリゴーの証言を追ってみよう。

彼は初期のバレスについて次のように語っている。「解放の試み、反抗といったものは、私にとっては不合理きわまりない因習を完全に受け入れてしまうことと同じで、それに比べ、より好ましいとは思えません。反抗は楽天主義の一形態で、巷にある楽天主義より嫌悪を感じさせる度合いが、ほんの少し少ないというにすぎません。反抗が可能となるには、反抗する機会に直面すること、つまり、ものごとに目指すべき秩序があることが前提とされているのです。目的となった反抗もまた楽天的なもので、これは変化、無秩序を、それだけで満足しうるものとするわけですから。私にはそこに満足できるものがあるとは思われません。」多分に影響を受けてきたバレスに対する発言である。そして、最後の部分はダダの中にいながらダダに対する批判となる。ダダイスト達の反芸術は反抗のための反抗であり、その認識が『三面記事』の中で端的に表わされている。『三面記事』は〈文学〉に掲載する予定で書かれた未発表原稿である。「昨日、パレロワイアルの公園でダダの遺体が発見された。自殺と推定されていたが（誕生以来この不幸な人物は自殺の恐れがあった）、アンドレ・ブルトンが全面的な自供を行った。」ダダは生まれた時点で消滅すべき運命にあった運動だった。ブルトンはそれに手を貸したにすぎない。いずれに

しても反抗はいかなるものであれ楽天主義でその中で満足が得られるものではないというのがリゴーの言い分である。

次いで思想について以下のように証言している。「彼は思想で遊んでいます。彼は分析の楽しみを説いています。分析で楽しむことは出来ると思います。そして、それで楽しんでいるときは、その遊びが目的になり、その思想が究極のところどういったところに導いていくかは考慮に入れようとしません。」「一人の人間が、何千回となく同じことを確認するだけで満足するということには驚いています。それでも、その思想の意味するものが、それを組み合わせることやそれを組み合わせるとき味わう面白さより、力を持つ結果となるのです。知性が疑いや落胆、そしてそれがなんであれ、充足することの不可能性に導くのは避けられないことなのです。」

究極のところでの人の求めるものは満たされ得ないのである。こうした悲観主義は必然的に質問者に自殺の論理を求めさせる。そして、この証言台で自殺について次のように語っている。「自殺に何を求めようとも、それは絶望の行為、あるいは、自尊心を守る行為なのです。自殺すること、それは極度の障害があったり、心配ごとがあったり、あるいは単に考えてみることもあるといったことを認めることなのです。」職業や道徳よりましな止むを得ぬ行為が自殺だが、それも反抗同様リゴーにとって受け入れられる行為ではない。ゆえに、自殺を次のように断罪する。「その行為に多少英雄的なものがあっても、それがその行為を好ましいものにするには結び付きません。私は昔から重大決定とか極端な決断を嫌悪してきました。」そして、すべての行為へのこのような断罪の中で、いかに生きていくのかと質問されて「その日その日で生きていくこと。紐の生活。寄生生活です。」と語る。では、こう語るリゴーの内面生活はどういうものだったのであろうか。彼のアフォリズムの中に見てみよう。

#### (四)

彼のアフォリズムは多岐にわたっており、様々な哲学的考察、語呂合わせ、

言葉遊び等の集積である。ここでは先に語ったことと関連のあるものに限り、考察してみたい。

さて、リゴーは欲望に関して一つの哲学を用意する。「喜びとは、まさにこの世の中で何よりも想像することが困難なものである。（あなたたちは誰と論争しようというのか?）」「欲望。人間が持っているものはおそらくそれが全てである。」「私は死なないでいようと努力している人間である。」この哲学に反論を用意するのはたやすくはない。充足の喜びを知るとまなしに新たな欲望を見出し、その欲望を充足させる努力を際限なく続けることが人間を死から遠ざけることだというのが彼の結論であるとするれば、欲望を抱く術を失ったとき、人は生の意味を失うことになる。「欲望とは私の幼年時代の感受性だ。」そう語るリゴーは欲望を持っていないことになる。そして、感受性とは詩人の持ち分である。だから次のように言う。「君達は詩人で、私の方とは言えば死の側にいる。結婚し、小説を書き、自動車を買うがいい。」詩人達はその感受性故に、欲望を持ち行動を取り得る。ところが、リゴーは、それが出来ないのだ。しかし、欲望を持つことへの願望はある。「私の五感私のものではない。誰しも自分のものというの是一件だけで、それは自分の欲望である。私は自分のもので生きたいと思う。」五感が自分のものでない以上、そこに欲望を生み出す契機があるのだろうか。欲望がない以上行動は取れない。その結果、リゴーは行動をすることを拒もうとする。「ジレンマ。二つに一つ。しゃべらないでいること。だまらないうでいること。自殺だ。」ここでリゴーは二者択一を迫られ、いとも簡単に自殺だと言っている。「しゃべるべきか、口をつぐむべきか」というような積極的な行動選択ではない。リゴーはいずれの行動も取らないでいたいのだが、それが不可能である故にジレンマに陥る。そうした奇妙なジレンマから逃れるには自己の存在を消しさるしかない。そこで、自殺だというのだが、それも行動である。そこで、次のように言うことになる。「私は自分の非在inexistenceを感じた瞬間からやっ生きてしていると感じる。私が生き続けていくためには自分の非在を信じる必要がある。」メッセ



ージを不在にするための言葉の置き換えであるが、リゴーはそうした言葉遊びにメッセージをこめてしまう。自分が存在しないとするときそこにやっどジレンマからの解放があるのである。彼は人生に積極的に関わっていくことを拒んでいるのである。「動かないものは私を魅了する。私は肘掛け椅子を、それが自分だと思ふほどに凝視する。誤りなのだ。どんな運動も。」自分が存在しないと思うこと、あるいは行動をしないものになること。そうした中でリゴーは倦怠を語る。「私は倦怠から逃れられない。倦怠、それが真実であり、本来の状態なのだ。」「あるのは倦怠だけ。それがローマに通じることはないのだ。（参照 精神的不具は倦怠から生まれた。）自殺と全ての墮落は、その源をたどれば、倦怠以外のなにものでもない。さらに、言うまでもないが、賞賛されるための唯一の基準、それは墮落である。」賞賛されるための基準としての墮落とは何を語っているのだろうか。ダダの運動に関わった人々に関してのことであろうか。リゴー自身の倦怠の中には何も存在しない。ツァラは「無rien」を語った。しかし、リゴーは「無néant」を語る。「無は水が肉体を包むように、私を取り巻いていた。無という言葉遣うのに、嫌気が差していないわけではない。私以外の誰にとってもそぐわない用語だ。親愛なる無よ。上着を取って寛ぎなさい。私しか知らず、私しか語る資格を持たぬ無よ。」そうして、彼はこう考える。「生きる理由はないが、また死ぬ理由もない。生に対する侮蔑を表わすのに我々に残された唯一の方法はそれを受け入れることである。生に捨てざる労を取るほどの値うちはない・・・」

とはいっても、人はいつかは生に別れを告げねばならない。リゴーは始まりと終りに関する考察の中で次のように言う。「始まりというものは理解を越えたものだ。それであるように丸いものが好きになる。人は始まりのないものに完璧さを見たがるものだ。」始まりがないということは終りもないということである。しかし、我々の時間は円環構造は持たず線的である。どこかで終止符が打たれねばならない。「明日、最後。／最後、明日、／じゃあ明日最後。／最後じゃあ明日。／明日、ついに。Demain, la fin/ la fin demain/ A

demain la fin/ La fin à demain/ Demain à la fin」紙に鉛筆で記されたこの種の短い言葉遊びはダダイスト達の好んだものである。それだけでは何の意味も持たない。だが、リゴーのアフォルスムの間にそれが加わると自殺を示唆することになってしまうのだ。それがいつのことであれ、待ち受けていたものの到来を告げることになってしまう。彼を取り巻く友人達すなわち詩人達に次のように言う。「あなた達の意志はもう沢山だ。あなた達はもう私を裁く権利を失った。少々困るのは、それが気持ちの荒んだ連中の手に届くということだが、おそらく偏見が唯一、受け入れ得る態度なのだ。けれども、私が、再び一花咲かせようという連中と一緒にされることはないはずだ。」それとは自殺を指す。多くの仲間達がダダの終息の後、文学活動を続けた。そこに戻る意志はないことを告げたかったのだろうか。ダダの運動に関わった友人達に対する断罪なのであろうか。ツァラは自らの手でダダの運動を終息させた。しかし、リゴーはダダの問題意識をそのまま内在化させ、ダダにとどまり続けたように思われる。既成の道徳も論理も価値観も存在しない場所に。さて、最後に、『自殺総代理店』見ておきたい。

(五)

『自殺総代理店』はダダの時代のもので、〈文学〉誌に発表する予定で書かれたものである。自殺請負業のパンフレットの体裁をとっており、次のように始まる。「当社は、この度最新設備の導入により、お客様方に迅速確実な死をお世話させていただける運びとなり、ここにお知らせ出来ますことを喜びと致すものです。〈仕損じられること〉への不安から自殺を諦められた方々が関心を持たれることは間違いございません。社会におきまして恐るべき汚染の要因となります絶望者の除去という観点から、当社は、設立に際し、内務大臣閣下より、名誉会長に就任いただくという栄誉を賜りました。」なんとも、喜々とした文面である。「さて、死は他の過ちと異なり、事後に弁明するというわけには参りませんので、当社では、人生に別れを告げられるにあたりまして、

ともかく、多少なりとも手順をふんでいただくようにと考えております。そのため、葬儀特設コースを用意いたしました。会食、友人や親戚の方々のお別れの挨拶、写真撮影（もしくは死後のデスマスクの作成、いずれか）、記念品の贈呈。自殺、納棺、教会での葬儀（任意）、墓地への遺体の移送という内容になっております。当社ではお客様の最後のご遺志を代行させていただきます。」ブラックユーモアというしかない。結婚式か何か人生における喜ばしい出来事の記念行事のようである。おまけに料金表までついている。実態は想像することも出来ないが奢侈税込みで500フランの芳香死から貧乏人向け5フランの縊死まで。縊死については縄は別売で1メートル20フラン、追加10センチごとに5フランと何とも細かい。自殺の方法にも貧富の差が存在するというわけである。こうした調子の文章、自殺を商売にし、『ある貧しい青年の物語』で語られたリゴーにとっての自殺の理由、すなわち貧困を解消させるという発想のユーモアからは、実際にこの人物が自殺をすると感じ取ることは出来ない。ドリュウ・ラ・ロッシェルは『ゴンザークへの別れ』の中で彼は絶対に自殺をするような人物ではないと思っていたと書いている。『自殺総代理店』は『三面記事』とともに〈文学〉誌に向けて書かれた原稿のおそらく最後のもので、ブルトンは受け取ったものの、ダダとの絶縁ということもあり、掲載されなかったのであろう。

その後のリゴーを見てみよう。1924年、離婚係争中の裕福な若いアメリカ女性グラディス・バーバーに出会う。初めてのアメリカ行きの後、夏の終わりに帰国、ドリュウ・ラ・ロッシェルをバスク海岸のゲタリーに訪ねている。1925年初め、再びニューヨークへ。裕福な人々と付き合いながら、貧困生活。1926年、グラディス・バーバーと結婚、新婚旅行の後、復活祭にはヨーロッパへ。リゴーはパリで何人かの友人に合う。1927年、結婚は失敗。が、貧困の中でニューヨークでの生活を続ける。1928年、ヘロインとアルコールに溺れた生活がひどくなり、11月に帰国を決める。1929年、中毒の治療のためラ・マルメゾンの、ついでサン・マンデのクリニック、10月に

はシャトネ - マラブリのクリニックにはいる。11月5日、古い友人ジャック・ポレルと夜を過ごし、翌朝6日、シャトネ - マラブリに帰り、心臓にピストルを撃ち込み自殺。9日、モンマルトル墓地で埋葬。

現実のリゴーの死は痛ましい状況下で起こった。『自殺総代理店』で描かれているような式典もなかった。「重大決定、極端な決断を嫌悪してきた」はずのリゴーは自ら行動を取ったのである。「私を私の悶着に巻き込まないでくれ。Qu'on ne me mêle pas à mes histoires!」リゴーはアフォリスムの中で叫ぶ。他人の問題ではなく、自分自身のの問題に巻き込まれることを拒むという逆説的論理。リゴーはそれを生きた結果、死を選んだのである。

#### 終りに

我々はブルトンが言うように彼の自殺を勝ち取られた自由と考えるべきなのだろうか。二つの大戦の狭間にダダ、シュールレアリスムという大きな前衛運動の指導的立場にあったブルトンがリゴーの死に文学上の立場から特別の意味を与えようとしたのは頷ける。しかし、死を勝ち取られた自由と考えるのは、この世界を絶望的に捕えている故にである。リゴーが勝ち取らなければならなかったのは、彼の自殺論を突き抜けたところでの新たな世界観であり、その袋小路から抜け出す理論なり、価値観であった。それを得ようと彼は自殺までの時間を生き抜いてきたのではないだろうか。死に到るまでのクリニックでの療養生活を考えるとき、それが自殺を用意するためのものだったと考えたくはない。しかし、リゴーの自殺を食い止める価値観が生まれる世相ではなかったと言えるかもしれない。世界はそれ自身の自殺行為とも言える次の大戦を用意していたし、リゴーの死を悼んだドリュウ・ラ・ロッシュェルは、第二次大戦中に対独協力、大戦が終る直前に決意の上の自殺をしている。「嘆いてくれ。君達には遅れてくることを祈っている。」リゴーはそう語った。リゴーに遅れて、かつての友も同じ道を取ったのである。

ジャック・リゴーは、自殺を言葉通りに実行した非常に風変わりな人物とし

でのイメージが定着していて、その作品が正当に扱われ、取り上げられることのなかった人物である。日本でもほとんど紹介されておらず、『エクリ』の出版で、リゴーの全体像を知ることが可能となったが、それも版切れで再版を望む声があったにもかかわらず、現在どこの書店でも手に入れることは出来ない。数年前『エクリ』を求めてパリの古書市をあさっているとき、絶版になっているのはおかしいという声を聞いた。忘れられているわけではなかったのである。結局手に入ったのは1960年版の『自殺総代理店』だけで、その後、図書館を廻ってやっと、『エクリ』のコピーを手に入れることが出来た。専門から離れたことでもあり、不十分な議論に終始したが、あまりにも知られていない人物を紹介したいという思いで、拙文をしたためた。ここに語られたことは、主に『自殺総代理店』を元にしており、『エクリ』の中に新たに収められたテキストは参考として用いたのみである。

#### 参考文献

- "Ecrits" Jaques Rigaut , Gallimard, 1970  
 "Trois suicidés de la société", Arthur Cravan, Jaques Rigaut, Jaques Vaché, Union Générale d'Éditions, 1974  
 "Poésie Présente" No.49, à propos des "trois suicidés de la société", Alain et Odette Virmaux, Rougerie, 1983  
 『海』1970年9月号 「否定の英雄ジャック・リゴー」 J・M・G・ル・クレジオ、豊崎光一訳 (La Quinzaine littéraire, du 1er au 15 avril 1970)  
 『黒いユーモア選集』(下) アンドレ・ブルトン著、山中散生・窪田毅彌・小海永二編、国文社 1969 ("Anthologie de l'Hulour noir", Ed. Sagitaire, Paris, 1950)  
 『ダダー芸術と反芸術』、ハンス・リヒター著、針生一郎訳、美術出版社 1966 ("DaDa-Kunst und Antikunst", Hans Richter, M. Dumont Schauberg, Köln, 1964)  
 『ダダ宣言』、トリスタン・ツアラ、小海永二、鈴木和成訳、竹内書店 1970 (Sept manifestes DaDa, Limpisteries", Jean-Jaques Pauvert, 1963)  
 『ユリイカ』1981年5月臨時増刊 「ダダ・シュルレアリスム」青土社  
 『新集世界の文学』25、「自我礼拝」モーリス・バレス、伊吹武彦訳、中央公論社、1970

(文学部非常勤講師)